死の花束殺人

平　龍生

1

白い壁には蔦なども這っていて店構えは古風な造りだった。夜になると小さな探照灯が漆喰（しっくい）壁には投光されていて、建物全体が浮き上がって見える。

小久保怜がお気に入りのフランス料理店“ポアラーヌ”に、金窪悦子を案内したのほこれで二度目のことだった。

青山の一郭にあり、まわりには大使館跡地の小さな森などもあったので、大低の若い女ならこの雰囲気にうっとりすることになる。窓際のテーブルにつき、二人はボルドーワインを口にした。

「ブルゴーニュものにくらべ、ボルドーワインの味は女性的な味と香りだと言われているんだよ」

三十七歳の小久保らしい話し振りだった。端正な顔立ちと、渋い色柄のスーツ、このような店にはお似合いの一人である。

「ね、悦子の体のほうは女性的な味と香りだった？」

これは悦子独特のからかいのことばであった。二人は三十分前まではホテルの一室で抱き合っていたのである。

情事の名残りを悦子はテーブルの話題にしたのであった。

「ああ、女の魔性とやらに、また、わたしは目覚めさせられた思いになったよ」

小久保は一応は話を合わせた。

小粋な店で食事をしてからホテルに誘うのが彼の流儀だったが、悦子の場合はちがった。“わたしを先に食べて。おいしいフランス料理のあとではわたし自信がないわ”と悦子は今夜も、もったいをつけてから、自分のほうから誘った。

初めて二人が抱き合ったときも小久保はこの悦子の流儀に従った。

悦子は小久保が相手にする女の中では少し変わっている。

今流でいうところの自立した女で、それ

も横文職業のスタイリストというのが悦子の仕事であった。長く伸ばした爪のマニキュアは銀色で、髪は茶褐色に染めていた。見様によれば下品にも見えるが、二十三歳の女は美しい顔立ちをしていたので、むしろ、個性的な面が強調されていた。

とってつけたような小久保の誉めことばに、悦子ほ肩をすくめ「ふふふ」と笑ってみせだだけだった。あとは黙リ込む。

前菜は終リ、牛の尾の煮込み（タードゥ・ブッ・プレゼ）がテーブルには運ばれて来た。「変ったものを食べてみたいわ」と悦子が言い、シェフが顔を出し、本日の特別仕込みの料理を薦めてくれた。

前に会ったときは二人はもう少し饒舌だった。それだけお互いが相手に興味を持ったことになる。小久保も初めて悦子を抱いたあとで、感激の気持ちもあり、機嫌よく応じたのであった。

何人もの女を抱いて来た小久保だったが、悦子の感じ方は特別だった。絶頂感に近付くと悦子は首を後ろに引き、そして、上方に首を突き上げるようにした。

すると、首の筋が立ち、血脈が浮いて出

て、とくとくと血が脈打つのが小久保には看（み）てとれた。
全体にスリムな体つきの悦子だから、乳房はやや小さ目であった。
が、その分、円錐の美しい造型は保たれていた。固さもあった。
この一連の動作の中で、双つの乳首も強く膨（ふくれ）れ立ち、悦子の絶頂感も際立ったものになった。
それだけ、小久保の愛の技巧も勝っていたわけだが、達したあとの悦子もまた、快楽を享受することにかけては貪欲だった。
「体を離しちゃいや。ね、わたし、いまもう死んでるの。わたしじゃないみたい」
二人の体は深くつながれたままだった。そうやって悦子は心臓の鼓音が静まるのを待った。だが、抽送（ちゅうそう）の行為は終っているのに、悦子の肉道は、その余韻を楽しむように、いつまでもひくひくと息をした。
男のものを咥（くわ）え込んだ肉道が元のよう弛緩していく時間の分だけ、小久保も悦子の体の上で、放ったあとの愉しみを味わった。

二回目の今夜も、悦子は豪華なデザートを口にするように余韻の遊びをした。
自分のほうから括約筋のあたりに力を込めてみせ、二度三度と肉道を通して小久保に脈動感を伝えて来た。
正直のところ、小久保は年甲斐もなくこの小娘にしてやられていた。
上品さのある味と香り、それに加えて、小久保は女の魔性のようなものにも触れた気になった。
瓜実顔に少し細い首筋、いまも悦子が食物を咀嚼（そしゃく）するたびに鎖骨のあたりの筋肉がせわしなく動いた。
小久保は悦子が示すエクスタシイの表情をこのとき思い出したりした。
悦子が牛の尾の煮込みをフォークで捌（さば）き半分ほども口にしたとき、店の給仕（ギャルソン）が小久保あてに電話が入っている旨、告げに来た。
「ちょっと失礼するよ」
と小久保が席を立った
テーブルの上の白い洋皿に盛られた牛の尾 の肉片を削いだあと、悦子は皿の端に、尾の 骨の都分を集めた。三つ、寸断された

丸いが揃った。一皿に肉片は四つあった。あとの一つは満腹気味で悦子はそのままにしておいた。

三つの骨片は血の色のようなトマトペーストと赤ワイン主体のソースに染まっていた。ひとところにまとまっていたので見様によれば無気味にも見えた。

悦子は、小久保のいない席で、ナプキンで口のまわりを拭うと独り言を言った。

「あーあ、また死体を食べちゃったぁ」

まわりのテーブルを見回した。上等な会話を楽しむ連中が、グルメ料理を口にしていた。どの肉片だって死体にはちがいなかった。このとき、小久保が慌てたふうに席にもどって来た。顔が青褪（あおざ）めている。

「急用が出来た。うちに急病人が…」

と小久保は言い、非礼を詫びてから先に店を出て行った。

その後姿を悦子は眼で追った。

給仕に事情を伝えておいたらしく、デザートの木イチゴのシャーベットが一人分そのあとテープルに運ばれた。

「急病人か？まるであのひと、悪魔に魅入られたような顔をしていたわ」

これは楽しみを含んだ悦子の台詞である。二人が知り合ったきっかけは、毛皮の商品撮影でのことだった。小久保は高級毛皮店のオーナーで、銀座と青山の一等地に二つの店を持っている。夏の初めの季節に、ミンクや銀狐の毛皮の撮影というのも気の早い話だったが、これは広告印刷物を作るための手順としては通例のことだった。

スタイリストというのは、撮影のための小物集めをするのが仕事だが、その守備範囲はかなり広い。

悦子が毛皮の撮影で引き受けた仕事は、画面の背景物を揃えることだった。

季節は秋、冬になるので、スタジオのホリゾントには、アートフラワーが配された。このスタジオで悦子が用意したのはドライフラワーであった。

この業界では、悦子はドライフラワー専門のスタイリストとして知られていた。どんな花でも、また木の実の細工ものでも、乾燥され、手を加えられたものなら、悦子のところで揃わないものはなかった。

もちろん、画面ごとのイメージに合わせたドライフラワーも、悦子の得意とするとこ

ろであった。芸術的な感性と、手先の器用さを悦子は合わせ持っていた。
撮影のために用意した悦子の創作品をスポンサーの小久保はすっかり気に入った。そのような言辞を弄してから小久保は女としても魅力のある悦子を食事に誘った。
悦子が誘いにのったのは、毛皮を扱う小久保は商売柄、剥製品のことにも詳しかったので、悦子のほうが関心を寄せたからであった。

ドライ・フラワーも言ってみれば死の花、悦子は鳥や獣の剥製の仕方に興味を持ったのであった。皮の腐臭をとる薬品、剥製物の内臓などの摘出法、防腐剤の使い方を悦手は小久保から教わった、
実際に小久保は自分が猟で撃った雉子（きじ）を剥製にし、所持していた。
その話にも悦子は興味を見せた。
若い女の子にしては少し関心の寄せ方が異常だと小久保は考えてはみた。
が、毛皮だって見栄えは豪華だが、死体の一部にはちがいなかった。そのようなことを悦子は小久保にも話をした。
「美しい雉子（きじ）の剥製も立派な死体で

しょ」
と悦子が言ったとき、あらためて小久保は悦子の顔を見かえしたが、悦子は形のいい唇をすぼめ、小さく笑ってみせただけだった。料理店の小窓からしばらく、悦子は外の樹々の暗い梢を見やってから、ひとり、テーブルの席を離れた。
風が冷やりと肌に触れた。心地よかったが、悦子はもう別のことを考えていた。
(早くチャツピイのところに帰って上げなくちや)
表通りに出て、タクシイを拾った。
「お嬢さんどこかで見たことがあります」
中年の運転手が話し掛けて来たが、悦子は無視した。カーリーヘヤーに、ちょっときつい目のアイシャドウ、それに大きな黒皮製の衣裳バッグを携帯していたので、悦子はタレントの誰かとまちがえられたようだった。
口をきかない女に気を悪くして、男の運転はその分、乱暴になった。
青山通りを抜け車は隣接の世田谷区に入り、赤堤まで走った。
比較的古い家並みの揃う郭で、悦子はこのあたりの環境が気に入っていた。

祖父の代から続いた古い屋敷で、悦子は一人住まいをしている。
敷地三百坪はあるので、マンション経営に乗りかえないかと不動産屋がやって来たこともあるが、悦子は受け付けなかった。
二十三歳で七部屋もある家に一人で住んでいること自体、まわりの者から見れば奇異に映るはずだった。
二年前までは祖父と二人暮らしだったが亡くなった。悦子は小さい時に両親を亡くし、祖父と祖母に育てられて大きくなった。
遺産を受け継いだ悦子は、賃貸しの家作も他にあったから金には不自由しない身分だった。その分、自由に生き、そして自分勝手な性格も身につけた。
古い木戸と木塀のめぐる屋敷は、暗い闇に沈んでいた。
庭樹なども植木屋の職人を入れて小ぎれいに整えるといった老人趣味もないので、少し荒れたふうに塀かち一部ははみ出していたりする。
古い洋館だが、それだけに趣きもある。戦災で焼け残ったので明治の遺風をいまに伝えているといった物珍しさの感じさえあった。

悦子は重い木の扉を押し、明りをつけると、その足で真直ぐ自室に向かった。八畳間の居室兼寝室で、壁際には頑丈そうな鉄の脚を据えたベッドが置かれていた。

暗い部屋に入り、ベッドの際の小さなサイドテーブルの上のレース貼りのランプシェードを灯した。枯れた葉脈のような模様編みのデザインで、ランプの傘の色もオリーブグリーンだった。

ベビーベッドが一つ、ベッドの枕元に沿うようにして置かれており、ランプシェードの余映がそのあたりにもとどいている。「チヤツピイ、一人で淋しかったでしょう」

と悦子は語り掛け、ベビーベッドの寝床の上に寝かされていた動物を両手で取り上げ、胸に抱き止めると、頬ずりをした。

チャッピイと呼ばれたのは体長十二、三センチほどの栗鼠（りす）だった。

濃茶色の体毛に黒の縞模様のあるシマリスである。悦子はまるで縫いぐるみの人形のように扱った。

シマリスの体は硬直しており、それ自体はすでに死体だった。

いや、剥製の、縫いぐるみとでもいうべき

だったかもしれない。
赤ん坊をあやすように悦子は、胸元に抱きとったリスの死体を揺さぶりながら部屋の中を一周した。
ベビーベッドに敷き藁（わら）代りに、枯葉や乾いた苔（こけ）、それから枯草なども敷かれていた。
胡桃（くるみ）の実やどんぐり、樫の実なども一緒に置かれていた。
それも着色されていて、赤や黄、それに銀色の木の実もあった。
悦子が装飾品のようにして作り上げたドライフラワーの作品だった。
部屋の明りはランプだけなので、暗い影が悦子にとり憑（つ）いた。
まだ、幼児ことばを何やらぶつぶつと呟きながら、髪の長い女は、自分だけの時間の中に身を置いた。
もう、小久保との情事のことも、小久保がフランス料理店に電話が入り、急いで飛び出して行ったことも、悦子はきれいさっぱり忘れているかのようだった。

「烏なんて死の鳥じゃないか。そういうの掴まえて一体どうすんのよ」
北山達也は呆れたように金窪悦子の顔を覗き込み、言った。二人がいつも打ち合わせの場所に使う赤坂のカフェ・バーでの会話である。いまは昼すぎのことで、硝子の外面の向こうには人の行き交う姿があった。もう夏の陽射しが街路にも溢れている。
悦子はいつもの指定席にいた。
奥まった隅の場所には飾り棚があり、大きなトルコ壷にどさりと投げ込まれたドライフラワーの花束が、悦子の背後にはあった。燻（くす）んだ色合いの枯れた花束は悦子の作品であった。丈の高い草や、穂のあるもの、それに人工的に染められた花や果実のアートフラワーがアンチックな店の雰囲気に熔け込んでいた。
その場所だけ少し暗く、落着きを見せていた。燻んだ花の色合いのせいである。
悦子流の表現によると『全部、わたしが殺した花よ』ということになる。
「だからぁ、ちょっとしたお遊びのビデオ作品をその依頼主は作りたいんでしょう。何で

もその発想によるとね、鳥取の砂丘に行って、ロングの引きの絵で、遠景の一点に、カラスを配したいんだってえ」
「カラスはじっとしていないよね」
「当り前じゃない。捕まえたらね、剥製にしちやうのよ」
さらりと言ってのけた悦子は、口元にメンソールタイプの細い外国煙章を寄せた。銀色のマニキュアの爪が、紅のついたフイルター部分を強くつまみとっている。
北山はコマーシャルのディレクターで、もう何度か悦子と組んで、テレビCMを製作した。やはリ、ドライフラワーを生かした作品であった。
三十一歳、この世界では仕事の要領もおぼえ、また感性にも磨きのかかる年齢だったので売れっ子の一人だった。
北山は、悦子の下唇を注意して見まもっていた。さっき「捕まえたら剥製にしちゃうのよ」と言ったとき、悦子は口元を歪め、そして下唇を噛んだ。そうやって唇を湿した。
(悦子のヤツ、少々興奮気味だ)
いまからホテルに誘えば、悦子は昼間か

らでも応ずるに違いなかった。
何度も悦子を抱いた北山は、悦子の欲望の表わし方のことがわかっていた。
北山が抱いた女の中では、淫蕩さにかけては悦子がいちばんだった。
(あの爪がおれの背中に喰い込んで来る時、この女は自分から腰を使い始める)
その場面のことを考え、北山も、知らず知らずのうちに、唇を湿し、口の中に乾きを覚えてコップの水を一口のんだ。
だが、これから二つほど打ち合わせの仕事が入っていたので、北山が早口になり悦子に言った。
「問題は、カラスの採取人(ピッカー)よね」
「あとの処理は悦子がやるってわけだ」
北山は、悦子が、ペットのリスを剥製にしたことを知っていた。
真夜中、ひとりで帰宅したとき、部屋の明りをつける前に、チャツピイが、飼主の足元にまつわりついて来た。
餌をもらうための行動だったが、悦子は何か柔らかなものを踏みつけた。「ききい!」というような声を子リスは上げた。

明かりをつけたとき、もう、チャっピイはぐったりしていた。
踏みつけた場所が悪かったらしく、ペットの小動物は内臓破裂の状態だったのか、直ぐに、冷たくなった。
北山が耳にしている話では、リスは剥製にされ、ドライフラワーを作るときの乾燥剤シリカゲルの敷き詰められたベビーベッドに、いまも、横たえられていることになる。乾燥しただけのことならミイラじゃないかと北山は考えた。
が、それ以上のことは悦子に問い質さなかった。
(死体のペットか)
北山は、その話を聞いてからは一度も、赤堤にある悦子の一軒家には行っていない。生きていたときの子リスは可愛かったが、死体のペットを見たいとは、北山は思わなかった。
「カラスを捕まえるなら高須のヤツがいいよ。あいつ埼玉の在だろう。まわりにはたんぼがあるって言ってたぜ」
北山は採取人(ピッカー)に、高須慎司の名を上げた。採取人(ピッカー)と

いういう言い方は、山野などに入り、草花や、熱果の枝などを集める者たちのことで、ドライフラワー作りを業としている連中の間ではそう呼ばれている。

高須は北山の助手で、雑用係をつとめていた。齢は二十一才、映画の世界にたとえれば助監督見習いといった職分だった。CMの世界では進行係と呼ばれることもある。もっとも、高須はまだ一本の仕事を全部任ざれたことはない。

いまは便利屋稼業というわけだった。

「高須ちゃんならやれそう」

と悦子が応じた。

何回か、スタジオなどで二人は顔を合わせたことがあった。

北山は、悦子に自分の仕事の注文をつけてから、次の打ち合わせのために、カフェ・バーを出た。

羽毛状の花穂のあるフェザーグラスの花束を銀ねずみ色に染めてくれと北山は自分の頭の中にある絵コンテの一コマのイメージを、悦子に伝えた。

悦子はミントティを注文し、刺激臭のある紅茶を飲んだ。

さっきはのどが乾きオレンジのフレッシュジュースをストローで吸った。
この店から高須慎司に電話をした。ちょうど、電話口には高須が出た。
「出来たら生きたカラスよ。そうね、三羽もいればいいかしら。でもね、カラスの濡れ羽色っていうでしょう。色の黒い、元気そうなヤングのほうがいいわね。そうそう、高須ちゃんのような感じよ」
と言い、悦子はあとは笑うともない笑ってみせた。
色の浅黒い若者というのが、悦子の高須に対する印象である。会話はその印象につなげたものだった。
高須は二、三日うちに、生きたカラスを捕まえてみせますと約束した。
「カラスは頭がいいのよ。依頼人もね、神社の森に行って捕まえようとしたんだけど、餌でおびき寄せるのには失敗したそうよ。アホーって言われないようにして。カラスのずるるさは人間を超えてるそうよ。ああ、それからギャラだけど……」
と言い、悦子は電話口で声をひそめた。
ボックス型のしゃれた電話室は外部とは遮断

されていたので声はもれなかったが、悦子は少しかっこをつけた。
「あのね、高須ちゃんてさ。ね。童貞なんでしょ。前に、高須ちゃんがさ。年上のわたしに憧れてるって、飲み会のときにね。話が出たことがあるのよ。ほんとう?」
それまで真面目ぶって悦子の話に応じていた高須が声をのんだ。
「……そりやあ、金窪さん、あの、凄く女っぽいから」
高須としては精一杯、自分の気持ちをアピールしたつもりだった。
「それじゃね。いただいちゃおうかな。わたし童貞キラーでもあるのよ。ね、わたしも、もしかしたら、採取人（ピッカー）だったりしてぇ」
相手が緊張しているのが手にとるように伝って来たので二歳上の悦子は、軽い口詞で口説きの文句をこのとき、高須の耳に吹き込んだ。

3

小久保怜と金窪悦子が、二回目に会った

日から五日ほどが経過していた。
お互いに連絡もしなかったので、二人は逢瀬を持つことはなかった。まわりには秘されていたことだったが、小久保は毎日、焦燥のうちに日を過ごしていた。
妻の日佐子もまた同じ気持ちだった。フランス料理店ポアラーヌで、小久保と悦子が会食中、小久保あてに入った電話は緊急事態を告げていた。
小久保の妻は〈一人娘の麻実子が一人寝かされていた子供部屋から姿を消していることを知り夫の行方を探して、ポアラーヌに電話をして来たのだった。
日佐子はこの夜、観劇会に誘われ、知人と出掛けていて家にいなかった。
日佐子の母親が五歳の麻実子の守り番に呼ばれ、留守を預かった。
麻実子は幼稚園から帰ったあと、日佐子の母親と過ごし、夜は早目に子供部屋で寝た。夏にしてはしのぎやすい夜のことで、一階の子供部屋の窓は明けられていた。
日佐子の母親は午後九時三十分頃に、子供部屋に様子を見に行った。
窓のカーテンが風に吹かれていた。涼やか

な風が部屋には招き寄せられていたことになる。
縫いぐるみが枕元に置かれたベッドには麻実子の姿はなかった。
そのあとの失踪騒ぎである
。誘拐事件？
小久保夫妻は初めにそう考えた。思い当たる節が小久保にはあったからである。
毛皮店の経営は景気の冷え込みが続き順調ではなかった。資金繰りをするために銀行筋からも金を借り、青山の店舗には抵当権もついていた。そのへんの事情を嗅ぎつけた質のよくない 不動産業者で、いわゆる地上げ屋と言われている連中から再三、土地を売り渡してくれないかと持ち掛けられた。
彼は小久保家に身を預けた養子の身であった。自分の一存で、店の処分は出来ない立場にある。
怜の浮気の実態の一部を地上げ屋は調べ上げてから彼に接して来た。養子の身だと知ると今度は日佐子に接近し、地上げ屋は二、三の怜自身の女関係のことを親切ごかしに日佐子の耳に入れた。
このところ夫婦仲も悪かった。

麻実子は日佐子の病死した先夫との間に生れた子供で日佐子は再婚、元は怜は使用人の一人だった から何かにつけ怜は気まずい思いをして来 た。

生来の女好きの質（たち）もあるが、怜が外で女たちとの時間を過ごすのも、あまり家には帰りたくない事情があるからであった。二人の聞では離婚の話も持ち上がっていた。経営者としては失格、その上、麻実子は、怜にはあまりなつかず、父親の役目も果たしていなかった。

失踪事件のあと、人命にかかわることだかち夫妻はすぐに警察に連絡した。

警察は誘拐事件と見て、係官を派遣し、小久保家に人員を張リつけにし、身代金要求などの連絡が来るのを待った。

が、一切、連れ去ったと思われる者からの接触はなく、事件の発展は見られなかった。ただ、何者かが庭に侵入し、脚立を使って外から窓に立て掛け、子供部屋に入り、幼女を連れ去った痕跡は警察が確認した。指紋も足紋も特定すべきものは何も検出されていなかった。

東京郊外・調布市の広壮な屋敷の勝手口は

開いていたので、犯人の出入は容易な状況にあった。
警察はいまのところ、地上げ屋の暗躍があることに関心を持っていたが、特に誘拐するほどの切迫した事情はなく、その方面では何の手掛かりも得られないでいた。
丹念に一つずつ、小久保夫妻にかかわる個人的事情を洗いながち、犯人像にせまる方法で、現在は、警察は事件解明に動いているところだった。
新聞発表は押さえられた。犯人を刺激する策は望ましくなかった。
子供の命が賭かっていたからである。
事件後五日が経ち、何の手掛かりも得られない現状だから夫妻は焦燥の色を濃くしていた。
手掛かりといえば、車のタイヤの軋る音を夜九時頃に、近隣の者が耳にしただけで、これとて直接、事件とかかわりがあるのかどうかも特定出来ない状況にあった。
怜は担当の須藤沢事に、いくつかの自分自身の女関係もたずねられた。事件当日、ポアラーヌで食事を共にしていた金窪悦子のことも警察は知った。妻の日佐子が、夫の女

関係のことを須藤刑事に喋ったことで、彼はその間の事情を問い詰められたのである。
麻実子の顔を見知っている者の犯行と一応は考えられるので、その点の取調べをすすめた結果、小久保家には一度、ドライフラワーの作り方を実地指導するということで、金窪悦子が訪れていることがわかった。悦子は日佐子とも顔見知りということになる。
が、アリバイとしては、怜と悦子は麻美子が失踪したと思われる時刻頃には、フランス料理店で同席していたわけだから、須藤刑事は幼女を拉致した可能性のある者から、悦子は除外した。

4

日中三十度を越す暑さが続き、本格的な夏が訪れていた。
高須慎司のカラス狩りは散々な結果に終った。餌で誘き寄せる作戦は完全に失敗した。カラスは人が近寄るだけですぐに飛び立ち、生きたまま捕獲するなど到底無理だった。
結局、高須は悦子の許可を得てから、ゴミ集積場に集まるカラスを早朝の時間、空気銃

で射ち殺した。三羽が犠牲になった。
捕獲地からバイクを吹っ飛ばし、三時間後には、世田谷赤堤の悦子の家に、高須はカラスの死体をとどけた。
まだ朝の時刻、悦子は朝食を了えたばかりだった。
朝のシャワーを終った悦子は、まだ濡れた髪のまま高須を迎えた。
「ね、わたしが解剖しちゃうところを見て行く？」
と悦子はまだ紅を染していない口元を歪めるようにし言った。これは心が昂ったときの悦子の癖である。
「いいですよ。アシスタントディレクターとしては何でも出来なきゃいけないから」
高須は立会う旨告げた。
悦子はノースリーブのタンクトップの上衣を着用していた。ブラジャーはしていないので、乳首のかたちが薄い衣地を通して見えた。ぴったり腿のかたちに密着したコットンパンツも、女の体の線を強調している。
高須は悦子が抱けることに大きな期待を寄せていたので、悦子の言いなりになった。年下の女性だと自信はないが、悦子なら

性の手ほどきをしてくれそうであった。
あまり気持ちの悪いことは好きではなかったが、あとのめくるめく思いのことを考えれば、高須は少々のことは我慢すべきだと自分に言い聞かせた。
もちろん、高須は子リスの死体をいまも保存しているという悦子の執心ぶりのことは北山から聞かされ知っていた。
悦子は高須を先ず母屋とは離れた場所の物置き庫に連れて行った。
庭の隅にあり、長方形のコンクリートボックスといった感じの建造物である。大きさは十畳分ほどもあった。
冷んやりとした空気の部屋だった。
初めに高須の眼には、天井や、壁に吊り下げられたドライフラワーの花の束が見えた。
「ここは陰干しにしておくのに絶好の場所なの」
と悦子が説明をした。
青や黄の色、桃色に染められたスターチス・シヌアータ。小葉がたくさんあり色添えに欠かせないスターチス・インカーナなどなどが所狭しと並べられている。聞き覚えの

ない花や草の名を二つ三つ、悦子は得意気に高須に語ってみせた。
部屋のいちばん奥に防火用の水道栓があり、、その場所は、俄かづくりの台所のようになっていた。小さな木棚も壁に沿ってある。キッチンセットが持ち込まれており、外からの自然光がとどけられたとき、高須はその場所に、手術用具のようなものがあるのをみとめた。
高須は網目の布製袋に三羽のカラスの死骸を入れ、手にぶら下げていた。
「すばやく処理しなくちゃね。いまは暑い季節だから」
悦子はステンレス製のキッチンセットに真直ぐ歩いて行き、それから後ろに従った高須の手から注文品の死骸を受け取った。
棚の上には白磁製のトレイがあり、その中に無造作にメスやピンセット、手術用鋏、注射器などが投げ込まれていた。
「こんな小さなもの、どうってことないのよ」と言い、悦子は手術医にでもなったつもりか、白衣を身にまとった。
薄いゴム製の手術用手袋を手際よく、両手にはめる。

「これ、まだ生暖いわよ。さっきまで生きていたのよね」
ステンレス台の調理スペースの上に悦子はカラスを一羽、横たえた。窒気銃で撃ったとき、一羽だけ急所が外れたとみえ、羽をばたつかせていたのがいた。その一羽にちがいと高須は思った。
悦子は薄暗い場所だったが、目が慣れたのか、てきぱきと、死骸の処理をした。メスの一本を手にし、カラスの腹を上にすると、下から上にと腹部にメスを入れた。腹が裂け、ぬるりとした感じの内臓がはみ出て来た。
血はそれほど流れなかった。
「きっと肋骨（あばらぼね）ばかりよ。痩せガラスってことばがあるぐらいだもん」
悦子は腹の中に手を入れ、内臓の摘出にかかった。鳥賊（いか）のはらわたを取り出すようなものだった。それから細く尖ったスライザーを手にし、何ヵ所かの内臓部分を切断した。血の管が切られたとき、ステレンス台には血の量が増えた。
開腹されたカラスは赤い肉と肋骨だけにされた。処理された死骸を、悦子は傍らの水道栓をあけ、水洗いした。

それから、高須に命令し、部屋の隅にあった大型の水槽を持って来させた。熱帯魚などを飼うときの水槽である。光を通さない濃褐色の丸壜を棚から二つ取り、悦子は高須にその水槽の溶液を空けさせた。

「ふつうはね、防腐用にはフォルマリンが使われているのだけど、わたしは炭酸ナトリウムを使うの。これはね、古代エジプト人がミイラを作るときに使った秘法の一つ、乾燥させるなら鉱塩と言われるナトロンで充分なんだけど、干からびたカラスじゃ困るでしょ。剥製って感じじゃなく、生きているようなカラスのミイラをわたし作りたいの」

悦子は饒舌になった。一

何かに憑かれたような眼になり、悦子は高須を見かえした。

「金窪さん、こんなやり方、どこで覚えたんですか」

高須はストレートにたずねた。悦子が興味を示したことに彼は応じられるほどの心の余裕もなかった。

もちろん、知識もない。

「ふふ、独学よ。ドライフラワーだって生きている花を殺すんじゃない？死体処理法も

似たようなものよ。動物と植物のちがいが、特にあるとは思わないわ。高須君、ちがうと思う？」
「ちがうと思いますけど」
「あら、どういうふうに？」
「ドライフラワーは美しいからいいけど、動物のってどこか気味が悪いじゃないですか」
「それは、動物の場合、ミイラって感じしか、高須君の頭の中にはないからよ。生きていたときよりも美しい死体だってこの世にあるかもしれないのに」
「…そうかなあ」
としか、高須は答えられなかった。
冷んやりとしていたコンクリート部屋だったが、高須は額が汗ばんだ。友人から借りた空気銃でカラスを撃ったときから、嫌な気分が続いている。
それが解剖するところまで見せられ、その上、得意げな悦子のミイラ談義だから余計のこと、高須は気が滅入ったー。
高須は悦子のやや後ろに立ち、あとの二羽を処理する悦子をただ見ていた。後姿を見て、自分に欲情の気持ちを強いた。円い肩先は

露出され、体を前に傾けるたびに悦子のノーブラの胸元が揺れた。
下唇をきゅっと噛み締め、悦子は時折り、その下唇を湿した。
一人、昂奮している様子に、先ほどから、高須は気がついていた。三羽のカラ入が水槽の炭酸ナトリウムの液体に浸され、悦子の作業は終った。
「ふつうは人間で二十日から七十日ってところ。小動物ならせいぜい十日ね。チャッピイはこの処理が終ったあと、特別にホルムアルデヒドという防腐剤を体内の血管の中に注入したの。パーフェクトよ」
悦子はゴム製の手術用手袋を外す。
二人はコンクリート庫の外に出た。
悦子が鉄の扉を閉めるとき、高須はもう一度、闇に閉ざされようとする庫内を見た。
枯れた花束が眼に止まった。
「今度は高須君を料理する番よね」
と言い悦子は意味あり気に笑ってみせた。

5

寝室の隣の都屋は八畳敷きほどの板の間で

、アトリエふうの造りになっている。
薔薇の花だけでも数十種、オニアザミやデージーフラワー、紅花などの名を知られたものから、アワ、キビなどの殻類、それにドライナッツと呼ばれる木の実まで、アトリエには未完成の作品も含めて百種類以上の花などが揃えられていた。
高須はこのアトリエを通り寝室に案内された。さっきは隠花植物を見る思いだったが、花や草は着色されたものもあって、燻んだ色合いの中にも華やかさがあった。
ガラス製の壜型の花器や、壷などに投げ入れられたドライフラワーは、咲き誇っているようにも見えた。乾燥剤の敷かれた箱に横たえられている製作途中の草花は、棺（ひつぎ）中におさまっているようでもある。寝室の横手が浴室になっていた。
悦子は高須にシャワーを浴びて来るように言った。
高須はシャワー室に入っただけで、自分のものが屹立（きつりつ）の兆しを見せているのをみとめ、慌てたふうにシャワーの栓をひねった。
このとき、寝室にある電話が鳴り、悦子

が誰かと話をした。
シャワー音に打ち消され、高須には悦子の会話の内容は聞きとれなかった。
「大丈夫よ。あなたに教えられたとおりカラスはうまく処理したわ。もう一つの話、わたし、早いほうがいいと思うのよね。そうそう、死者の結婚式って趣向悪くないじゃない？わたしあなたの有能な助手よ。絶対、あなたを裏切ったりしないから」
相手が何か答えた。悦子は短い会話ののち受話器をおいた「ふーっ」と一つ息をついてから、ちょっと宙空に眼を据え、それから高須が浴室から出て来る前に、タンクトップの上衣を頭から抜いた。
半円型の双つの乳房が小さく揺れた。さっさとコットンパンツを捨てその下のショーツも指に搦（から）めて遠くに投げた。
（童貞の男の子か。女にとってはちっともよくないけど、あの、初めて発射するときの感じは好きよ。たしかに、勢いよく、膣の壁に熱いものが突き立つような感じ…）
素っ裸になった悦子はもう白いシーツの

上に横寝し、淫蕩な女に姿を変えた。高須が女の体の扱い方を知っているとは考えられない。自分で潤いをつくっておかないと、受け入れるときに疼痛（とうつう）が伴うだけだった。

悦子は白分の指を股間に忍ばせた。

尖った爪は銀色のマニキュアは落されていたが、やさしい愛撫には不向きだった。

それで自慰をするときの例に倣（なら）い、悦子は自分流の指の遊びをした。内側の三本の指を上からかぶせ、指の腹で秘核（クリット）に小さな震動を伝えた。そうしながら、人差し指と薬指の両側の指を開くようにし、割れ目にかぶさった皮膜を外側にと広げた。

電話があった時間の分だけ準備の間が短くなったせいもあったが、まだ、悦子は秘核の揺さぶりだけでイクときの感じをつかんではいなかった。

が、早々に浴室のシャワー音は止んだ。高須は気持ちが逸っているらしい。

間もなく、もじもじしたふうに、腰にバスタオルを巻いて、高須が寝室に現れた。

ベッドの上で、素っ裸になり横たわっている悦子を見て、高須は一瞬足を止めた。
「いいわよ。早くいらっしゃいな。すぐにOKってことにしてあげるから。わたし凄く昂奮しているの。さっきだってね、あの場所で犯されたいって思ったぐらい」
悦子はちらと高須の腰のあたりに目をやった。勃起の状態にはなかった。大抵の童貞男は気持ちが昂ぶりすぎて、かえって萎縮しているものだった。
「ちゃんとお勉強させてあげるからね。高須君、女のひとの見たことないんでしょ？」
高須は首を縦に振った。
「みんな、わたしのきれいって言うのよ。ふふ、わたしね、ちょっとした露出症」
悦子に差し招かれた高須はじゅうたんに両膝をつけ、至近距離で、悦子の股間の形状を見るように言われた。
高須はビニ本や、裏ビデオは見たことがあるが、生身の肉飾りを眼にするのは初めてのことであった。
ひざまずき、大きく脚を開いた悦子の女性器をつぶさに眺めたとき、だらしなくなっていた男性自身が一杯に力を漲らせて来た。

それだけではない。悦子は露出症の喜びに浸りながら、なお、指を巧みに動かし自慰のショーまで高須にサービスした。

そうやりながら悦子は、秘核を包皮ごと震動させ、見られているという意識の昂まりと共に、その部分を熱核に変えた。触れているのが辛くなったとき、悦子の下半身には力が入った。指の腹に濡れの感じを知覚したとき、悦子はベッドの上に高須をのせた。男をあお向けにさせ、強く、漲り立っているものを指で押さえとり、挿入の角度を計った。女上位で、肉口に当てがった、赤い露頭部を少しずつ、腰を沈め、悦子は取り込んで行った。

悦子の体の中の血が騒いでいた。

思いっきり、乱暴に腰の上下運動をくりかえし、女の肉壁をいたぶってみたい思いにも悦子はなっていた。

寝室はまだ午前中のことで、窓からは眩しいばかりの光が射し込んでいた。何もかもが白目の下（もと）にさらされているような状況なのに、悦子は枯れた花野を裸身で駆けている自分の姿を想像していた。どこか花野の光景は灰色がかってもいる。

とげとげのある花茎の中を走り抜けたら、全身に血の条が噴き出るだろうかなどとも、悦子は考えていた。

痛さの感覚を頭の中で探った。童貞男の張ち切ったものを取り込む。それほど、潤っていないので、少し痛い。

その感覚を、しばしの間、愉しむ。

それから、悦子は何度か腰を沈めて行った。高須が苦痛の表情を見せ、切なげに声を漏らした。いや、息を止めているようにも見えた。そうこうしているうちに、悦子の内部（なか）は潤ってきた。すべらかな感触になったが、むしろ、悦子はその柔らかさの感じが嫌だった。

それで、恣意的（しいてき）に尻の括約筋をぎゅっと締め、咥え込んだ肉棒をじわじわと責め、次に一気に絞り立てた。

そうすると、ぎちぎちと、肉棒が悲鳴の音を立てているように悦子には思えた。

自分の肉道もいたぶりながら、悦子はつながった高須の一物をもいたぶった。小さな穴に捉えられた肉棒は、ほんとうに、叫びを上げたようだった。たまらず、高須が首を上にと上げた。「うっ！」と高須が呻

いた。ぴぴっと矢のような熟液が肉道に放たれた。そのことは強い男性器の脈動感からも明確に悦子は知覚した。

（ああ、いい！男のものが苦しそうにわたしの穴の中でもがいているわ）

もつともっと苦しめてやりたくなり、鋭敏になった男の露頭部を膣道でこすり立てながら、なお、悦子は強く締めつけてやった。悦子の頭の芯がじーんと鳴っている。

赤い炎のようなものが渦巻き、赤い薔薇の花の色が燃えていた。血の色にも似ていた。よくはわからない。何か、急激な気持ちの昂まりがあり、悦子は失神する前の空白のときにあった。

悦子は後頭都を引くようにした。鎖骨の尖りがあらわれ、首筋の筋肉がひき攣（つ）れたようになった。

一度放った高須は、なお、強い勃起の状態にあった。二度目は悦子の淫乱さが火を噴いた。

その分、高須は肉と肉がこすれ合う快感を今度はたっぷり味わうことになった。高須は感激した。

悦子の肉体に初回から溺れていた。

“童貞の男は一度だけ”というのが悦子の流儀だった。そのことは知の上で高須は悦子に性の手ほどきを受けたのだが、一度だけのことで高須は悦子の体の虜（とりこ）になってしまった。

若い男にはよくあることであった。

高須は悦子が、北山ディレクターと前々から肉体関係にあることは知っていた。いい関係のセツクスフレンドという仲である。自分も悦子の男たちの中に加えてもらえると思っていたのに、高須は相手にされなかったことで余計に悦子が憎くなった。

カラスの死体がその後どうなったかは彼には関係のない話だったが、それを口実に二度ほど悦子に電話を掛けた〉いずれも、軽くかわされた。「またカラスを掴まえるときお願いするわ」とだけしか悦子は言わなかった。

自分自身の性の欲望が押さえ切れなくなり、高須は二人が抱き合った一週間後、バイクを 駆って、直接、悦子の家に行った。

夜の八時頃のことであった。

下高井戸あたりの小路から分け入り、

赤堤に向かった。女子大の寮のあるやや広い道路を走っているとき、前方に、高須は一台のクラシックスタイルのレプリカ車を見つけた。イギリス車のパンサーで二人乗り、銀色の 車体は流線形のスポーツカー仕様だった。どこかで見た車だと高須は直感的に考えた。

角を曲がったパンサーはいっとき高須の視野から消えたが、その先の高塀に沿ってある道路をわが者顔に走っていたので、高須のバイクはまた前方にその目立つ車を捉えた。

高塀の切れた先を左に曲がれば、悦子の家になる。パンサーは左に折れた。

このとき、高須は中学時代の同級生の一人の顔を急に思い浮かべていた。車に見覚えがあったのである。数少ないタイプの高級車だったし、メタリックな銀色の車体のことも高須の記憶に甦った。

パンサーは金窪悦子の家の門前にとまり、そして悦子自身が姿を現わして、車を邸内の駐車場に導いた。高須は高塀の曲がり角にバイクを一旦停め、三十メートルほど先を窺い見た。車は吸い込まれ

、悦子の姿も消えた。暗い外灯が、枝葉が塀の外にはみ出ている古い邸の様子を鬱陶しい感じで映し出していた。
高須は、男を引き込んだ悦子に、強い嫉妬心を感じとった。さっきまでのどが乾いていた。バイクで夜の街を突っ走っているのは爽快だったが、のどばかりはひりついていたのだ。
悦子の均斉のとれた裸身のことや、じっくりと、観察させられた股間の肉飾りの型などが目先を掠めた。
肉穴におのれのものが接したときの挿入感も生々しく甦っていた。
何か、引っ込みのつかない欲望の昂まりに、高須はわれを忘れ、邸の内に足を踏み入れることを考えた。
得体の知れない悦子という女の一面も、高須は知りたくなっていた。
二日前のことだった。
六本木の撮影スタジオに、刑事が訪ねて来た。こっそりと金窪悦子のことを訊いて返った。北山が撮影の合間に近くの喫茶店に呼ばれ、あれこれとたずねられた。
その話は北山のアシスタント役をしてい

た高須の耳にも入った。
主に、金窪悦子はどういう質（たち）の女かということで、その交友関係なども刑事はメモしていったという。
その中に、金窪悦子と、小久保怜の関係を問い質すものがあった。
スポンサーと、ドライフラワーの美術を担当した女という関係以外のことは、北山は刑事には答えられなかった。乱れた悦子の男関係が、話のついでに、北山の口から出ただけだった。
「何か変なことが彼女の周辺にはあるんですか？」
という北山の問いに、刑事は「いや、間題があるのは小久保のほうだよ」と答え、北山の質問をはぐらかせた。
刑事の名は須藤と言った。
これらの話は、ことのついでに北山から高須が聞いたことなので、詳しいことは高須にはわからなかった。
が、北山が「あいつ変な女だからな。死んだ花に、動物のミイラ、ま、ＣＭ屋にはあいうのもいてもらわなくちゃ困るけどよ」と言ったのが、妙に高須の耳には残った。カ

ラスの死体処理の場に自分が立会ったせいもあった。
高須は表門の木戸の横に通用門から、暗い邸の庭に踏み込んだ。
先に入ったパンサーはこのとき、すでにカーポートに収まっていた。
高須は、初めは奥まで侵入して行く勇気がなく、庭の隅にあるコンクリートボックスの建物の陰に立ち、しばらく邸内の様子を窺った。この前、カラスの死体を持ち込んだ建物は月明りだけに浮き出ていた。
（ああそうだ。思い出したぞ。あいつは医者の息子で桑野鋭一だ。横柄な野郎だった）
遠い場所に停められた二人乗りのスポーツカーを見ていたとき、高須は桑野鋭一という男の名を思い起こした。
抜群に頭のいい男で、中学の時の同級生、それから医院の一人息子、高校は有名私立校で、R医科大学に入学のエリート、高校卒でCM屋の 世界に入った高須とは何もかも違いすぎる。
が、友人の噂話では、桑野はR医科大学を、不祥事を起こし退学になったという

ことになっていた。担当教授の怒りを買い、医師になる資格を剥奪されたのだと、その友人は高須に語った。

もっとも、その話も、又聞きで、話の要点そのものはぼけていた。

高校を卒業して、しばらくたってから高須の一家は埼玉に居住地を移した。その間、高須は成城の街に出掛けることもなかったから、桑野鋭一にも関心は持たなくなった。キザな タイプの男だったので「いい気味だ」と、高 須はその話を聞いたとき、思っただけだった。

高須が、邸の方角に目を向ける前に、悦子と連れ立ち、男が玄関のポーチの石段を下り、庭に立った。

二人は、高須の立っている場所に足を向けていた。高須は高塀とコンクリートボックスの間の闇に身を隠した。針葉樹が植わっており、すっぽりと、人の姿を包んでくれた。月明りが冴え渡っているように高須には思えた。

闇に眼が慣れたせいで、近付いてくるにつれ、二人の姿がはっきりして来た。

二人の話し声も耳近くのものとなった。

「あの有名なロンドンの切リ裂き魔ジャック・ザ・リバーだって医者だったって言うからな。おれだって名医の腕あり、メスさばきはまかせておけって」
「わたし、こわーい感覚を持続しているのってとても好きよ。精神の緊張力があって」
暗い闇を背にした二人だったが、月明りがあったので、樹陰の闇から二人を監視していた高須には、男の顔の輪郭はおおよそ、みとめることが出来た。
高須の直感が働いたとおり、悦子と肩を並べている男は、桑野に似ていた。二人はコンクリートボックスの前に立ち、悦子が金属音を響かせ、鉄の扉を開けた。
二人とも、この別屋の中に消えた。高須は樹陰を抜け、足音を忍ばせると、半ば開かれたままの扉に身を寄せ、内部に視線を走らせた。奥の場所の壁際にトーチランプが一つ灯っていた。あのキッチン台のあるあたりである。二人の暗い背だけが、光の輪郭と一線を画した。棚の上にある薬品壜と、手術用の道具に男が手を伸ばす。
(やつらここでまた何かの死体を処理する気なのか)

と高須はこのとき考えた。
が、高須は別の秘密をたまたま目撃することになった。キッチン台の手前の床上に、錆びた四角い型の鉄蓋があった。
その鉄蓋を男が開け、二人はやがて、地下室に消えた。
この前、このコンクリートボックスに入ったとき、高須は悦子の口から祖父が戦時中、防空壕として作った地下壕がこの邸内にはあることを教えられた。そのときは、高須はその話は気に止めなかった。。
地下室には一体何があるのか？
高須は、悦子に抱いていた肉体への妄想をこのとき捨てた。秘密の匂いを嗅ぐことに、全身が震い立った。
現実的な思いにも頭は向いた。
悦子の身辺を嗅ぎ回った刑事がいたことに高須の関心事は向いた。
まるで闇の中を手探りするような話だったが、いまは、悦子のことを知るいちばん身近な場所に自分がいるように思えた。
懐中電灯の明りが、枯れた花の吊り下げられた天井や壁をひと舐めするように、地底の

ほうから上にと乱れた光を投げた。
もう二人は無言だった。
高須は大胆になり、鉄蓋の開けられた場所に行き、下方を覗き込んだ。鉄の支え棒で鉄蓋は支えられていた。
冷たい風が高須の頬を撫でた。地下に通じる石段がくの字型に、闇の底に向けて伸びており、二人が一歩一歩用心しながらその石段を下って行く。
と、このとき、何か小さな物体が、高須の肢下の石段道に落ち、固い音を立てた。高須が着ていたポロシャツの胸ポケットから百円ライターがすべり落ちたのだった。
「なによ！」
悦子が鋭く叫んだ。
その声は、ライターの落ちた音が地下の空洞に、はねかえる前に反響音となり、高須の耳にかえって来た。
高須は下から見上げると天窓に見えるにちがいない四角い穴から、死角の揚所に身を退いた。下にいる二人が、様子を窺っているのが高須にはわかった。階段を降りる足音が止んだ。下は暗闇だから、百円ライターは発見

されずに済んだようだった。
　それでも男のほうは用心し、異変をたしかめるために一旦、上にあがって来た。高須はその気配にコンクリートボックスの外までのがれ出た。
「桑野くん、石ころでも落ちたのよ。それとも天井に吊るしておいた木の実でも自然落下したのかしら」
　鉄蓋のある場所から顔を出し告げたのか、悦子の声は大きく、そして、明瞭度が表わされていた。
（桑野？やっぱりあいつか！）
　高須は回り回った因縁のようなものを感じ、不思議な感慨に打たれた。男はコンクリートボックスを出、外の闇に顔をさらすと、しばらく、耳を澄まし、人の気配を聞きとろうとした。高須は針葉樹の陰で息を殺す。右手に明りのついていない懐中電灯、そして左手には何本かのメスなどの金属具が握られていた。
　それらの様子と共に、四メートルほど離れた闇から、高須は男が桑野鋭一であることをはっきりとたしかめた。鼻筋は通っており尖った顎が少し、しやくれている。痩せ

た感じと背の高さも高須が見知っている桑野であった。

用心のためか、桑野は半開きになったままだった鉄扉を内から閉めた。

鍵は内部からは掛けられなかったが、外から侵入者があれば、鉄扉の軌みの音が、地底にもとどくはずだった。

それで、高須はそれ以上、秘密の領城に立ち入ることが出来なかった。

およそ二時間ばかりも、高須は外の闇に立ちつくしていた。蚊に喰われた。

いつまで待っても二人が出て来そうにないので、この夜は引き揚げることにした。

が、鉄扉の外側に突き出た南京錠を掛けるための金具がビスで止められているのを高須は塀の外からの電柱の明りでたしかめた。手指で触れてみると、金具部分だけは新しく取り替えられたらしく、プラスねじの頭が嵌っていた。

いまは工具が手元にはなかったが、高須は工具さえあれば、錠前の金具を外し、中に入り込むことは可能だと判断した。

小久保麻実子失踪事件は十三日後のいまも第三者からの接触はなく、解決の糸口はつかめていなかった。
調布署の須藤刑事と、上司の捜査係長との間でも捜査方針に喰いちがいがあり、警察自体も暗中模索の状態にあった。
捜査係長は地道な聞き込み捜査、それも小久保家と利害関係のある連中の身辺捜査に重点をおくよう須藤刑事には命じた。
事件前から小久保怜が接触していた地上げ屋と呼ばれる悪質不動産会社が暴力団とも関係のあることから、この方面の徹底捜査を命じた。
小久保の妻、日佐子が夫の浮気の実態を、地上げ屋の連中から提供された事実に、捜査係長は一つの眼目点を見出した。
が、三流大学を出て、現場の刑事を希望し、いま、二十九歳になる須藤刑事は、新型の犯罪に興味を持つほうで、いかにもそれらしく思われる犯人像にはあまり関心を向けないほうだった。
犯人からの接触がないことから彼は、別の視点を持ち、夫の小久保怜を犯人に仕立てて

みた。夫妻は仲が悪く、怜は妻の連れ子、麻実子には余り好かれていない。
子供の感情は生なままで、死んだ父親の写真を麻実子はいつまでも飾り立て、自分の父親は怜ではないことを明らさまに示した。
怜は「お父さん」とは一度も呼ばれたことのない仮りの父親の立場を強いられていたのである。
須藤刑事は、怜にも犯意はあると考え、麻実子失暁当夜の食事の相手、金窪悦子をアリバイ作りに怜が利用したのではないかと推量を働かせた。それで、北山の仕事場のスタジオにまで出掛け、悦子のことをたずねた。
ドライフラワー作リの名人で、ペットの子リスの死体を乾燥体にし、いまもペットにしている女、須藤刑事は、フランス料理店ポアラーヌで怜と食事をしたときの様子を訊くために、直接、悦子とも会った。
ことばの端々に鋭さがあったが、特に変っている女というふうには須藤刑事には受けとれなかった。
スタイリストという横文字職業の女が、自分の住む世界の人間とは異種の感性の持主だということをあらためて知っただけの

ことであった。
が、調布署の管轄で仕事をしている須藤刑事の耳に、同様の事件がもう一軒、世田谷・成城で発生していることが知れた。私立大では名のあるR医科大学の名誉教授の孫の男児が、学習塾の帰途、何者かに連れ去られたのか、失踪して三日が経過していた。
自分が担当している事件同様に、第三者からの接触は一切なく、やはり、神隠しの状況にあった。
成城署管内の事件で、横の連携が悪いのは刑事たちの縄張り意識の弊害だったが、須藤刑事は警察学校で同期だった成城署の内勤者の友人に同様事件が発生したことを知らされ、二つの事件の類似性に注目した。
R医科大学の桜井名誉教授は、厳格な師として知られる人物だった。同時にR大学では首魁（ドン）の立場にあり、その勢威から、個人としては恨みを買っている面もないではなかった。
孫は桜井聖人（きよと）、九歳で小学校三年生になる。
名付け親は桜井剛人名誉教授で、行く行く

は聖人も医学の道にすすむはずだった。
それだけに眼に入れても痛くない可愛い孫で、七十二歳になる老人には、聖人は掌の中の珠玉といった存在であった。
その愛孫が何者かに連れ去られたのだ。老人の狼狽ぶりは傍目にも痛々しく映った。
聖人失踪二日目には、警視庁から、調布署に係官が派遣されて来た。
二つの事件とも極秘扱いだったが、本庁は当然のこと報告を受け両事件の類似性から、犯人像を割り出すために、須藤刑事にも情報提供などの協力を求めて来たのだった。
これまでの捜査の経過で、報告するほどの成果はなく、須藤刑事は自分の無能ぶりを本庁の係官にさらす結果となった。
が、桜井聖人失疎事件の背景には、いくつかの有力な情報があった。
一つは、桜井名誉教授の後継者である息子の正人（まさんど）現教授が、お馴染みの権力者争いの渦中にあること、また、剛人名誉教授に個人的な恨みを抱く者が十数人はいることなどである。
個人的な怨恨説では、剛人のご機嫌を取り結べずに、大学に残されず地方の病院に出さ

れた者、また地味な臨床医学の仕事に就かされ、第一線で活躍出来ずに不満を抱いている者などなど、複雑な人間関係がここでは浮き彫りにされていた。

一つだけ、須藤刑事が個人として興味を持つことがあった。医学生が強制退学させられた事件を、須藤は耳にした。この間の事情は次のようなものだった。

解剖学の授業では、医学生二〜三人の一チ―に、解剖実習用の検体が与えられる。現在は検体不足で、検体を確保すること自体が至難のことであったが、R大学は傘下に系列の病院を数多く保有していたことから、何とか解剖実習用の遺体が集まった。多くは身寄りない者などである。

某私立病院の院長の息子は、医者としての資格に人格的に欠陥があるとされ剛人名誉教授の怒りを買って学籍剥奪処分となった。与えられた二十代後半の女性の局部を特別摘出し、フォルマリン漬けにしたという話が学校側の耳に入ったのであった。

病理解剖の場合は、死因を究明するためにメスがふるわれるが、解剖実習となると、指の神経叢まで摘出し検分するから、遺族に火

葬後の焼骨しかもどされない。
いずれにしろ、検体の女性の局部も切りさいなまれる運命にあったが、その医学生の行為は、動機自体が不真面目とされ、また、人間の尊厳にもとる行為として指弾されたのであった。
本庁の係官は、成城署の刑事も、関心を持っている事例だと述べた。
須藤刑事は一人になったとき、ひらめくものがあった。
ほぼ、同時期に発生している失踪事件に、猟奇的な匂いを嗅ぎつけたというのが当たっていたかもしれない。
彼は、小久保怜の浮気相手の一人である金窪悦子が、子リスの死体をペット代リに可愛がっている話、それからドライフラワーのことを『死の花束』などと表現していることに注目した。
少年と少女が失踪したそのことには何の関連性もないことであったが、再度情報をとるために、彼は金窪悦子の身辺をさらに嗅いで見ようと考えた。

「霊的双生児ってことばを知っているか。いい表現だと思わないか」
と男は悦子に言った。
赤堤の古屋敷の一階の寝室の上に腹這いになり男は煙草を喫っていた。
傍らにシャワーを浴びたばかりの悦子が立ち、濡れた髪をタオルでこすった。
小さな湯玉が飛ぶ。バスタオルは身にまとっていないから、手を動かすたびに、小ぶりな乳房が、固そうに揺れ、それにつれて鎖骨が張り出たようになった。
「古代エジプト人は肉体にはカーと呼ばれるもう一つの命、霊力があることを信じていた。つまり、その魂のことを霊的双生児と呼びなしていた」
「生き物はその生命を失っても生き続ける。あなたのマミフィケイション ミイラ製作の技術は相当なものよ。ほら、わたしーの可愛いチャッピイ、黙ったままだけど、いつもいい子ちゃん、わたしますます好きになったわ」
と言い、髪を拭き了えた悦子は、ベビーベッドに寝かせてあった子リスの死んだ縫

いぐるみを胸に抱えとり、男の横に裸身をすべり込ませた。
「悦ちゃんがミイラになれば大丈夫、副葬品して一緒に葬ってやるよ」
「わたしも殺したくなった？」
「悪い冗談だよ、それ。おれのことを理解してくれるのはお前だけ、そうかんたんには殺さないって。ずっと生かしておくか」
男はゆっくりと煙草を喫った。
「この前、エジプトのミイラの副葬品について調べたらね。猿や犬や猫にまじって、ヒキガルやオオトカゲ、エジプト産コブラ、コウモリまで、ありとあらゆる物があるのよね」
「生きている世界と死んだ世界を分けて考えていたわけじゃないからな。みんな神さまの使徒ってわけだろ。副葬品は」
「鋭一クン、うんとわたしが昂奮する話をして。わたしイマジネーションの鋭いひとだからもうそれだけであそこが濡れるのよ」
男は桑野鋭一だった。
悦子は死体のペットを、ベッドの傍らに寝かせてから、桑野の少しきゃしゃな感じの背中に手を回した。
「防腐処置の方法だけど、今度はおれ、古式

にのっとってエジプト式にやろうと思っている。本格的なミイラ製造法さ」
「うわー、聞きたい。この前の女の子は現代医学の応用法、もう一つ、強い刺激に欠けていたわ」
「古式どおりだと悦子は神官役さ。ミイラ造りを司り、墓の守護者である神アヌビスになる。この神は体が人間で頭部はジャッカルだったので、神官はジャッカルのお面をかぶった。さて沐浴（もくよく）を受けた死体はミイラ職人たちによって細長いテーブルの上に横たえられる。テーブルの下にはカノボスの壺が、いくつも置かれる」
「カノボスの壺？」
「死体の比較的大きな内臓、腸、肝臓、胃、肺などがおさめられる各々のカノボスの壷の中には人の頭、犬の頭に、ジャッカルの頭、ハヤブサの頭が彫られていた」
「話が面白くなって来たわ。カノボスの壷も揃えましょうよ」
「すべて体毛は剃られる。仕事に精通した一人の専門家が死体の頭部に近づく。もちろん、桑野鋭一がその仕事人さ。細長い鉤状（かぎじょう）の器具を一方の鼻の孔（あな）

に入れ回転させながら施術する。篩骨（しこつ）を突き崩し上部の頭蓋腔に差し入れる。次に施術者は別の器具を用いる。これは細長いらせん状にねじれた棒で、先に小一さなスプーン状のものがついている。これを鼻孔に押し入れ、ゆっくりと少しずつ、鼻から脳髄を取り出す」

「ほんとうにやる？」

「同じ道具はないが方法は考えてみる」

「わたしもあなたの有能な助手になるわ」

そこで、悦子は一度、桑野に口づけを求めた。二人は軽く唇を触れ合った。

「次は内臓の摘出さ。黒曜石のカミソリのように鋭く研（と）がれた石刀が、必要だが、それはメスでがまんしてもらおう。神官が小さ な灯心草のペン先をインク壺につけ、死体の 脇腹に紡錘状の約十ニセンチほどの線を描く。今度の場合は子供だからもう少し小さな円で もいいということになる。あとはおれの執刀 の技術が生かされるってわけ。皮膚を切り開 き、ノボスの壷に入れる内臓が摘出され、作 薬は終了さ」

「防腐の方法は？」

「松脂（まつやに）を染ませた布で内臓は包

み、蓋はロウで密封する」
「あとは炭酸ナトリウムの粉末の入った棺にあの子の死体を寝かせるってこと？」
「いや、ヤシ油で死体を清め、その上を亞麻布の包帯でぐるぐる巻きにする。皮膚の乾燥をふせぐと共に、死体に虫がつかないようにするためさ」
「わたしたち血に飢えた殺人者なんかじゃないわ。生きた花を殺すように人を殺すだけ。そうね。死体に美しい花を咲かせる。これだってアートフラワーの表現法の一つかもね」
「もうお喋りは止めにするか」
「うん。わたし心臓がどきどきして来たわ。わたしが、鋭一くんを襲ってもいい？」
いつものように、悦子が気持ちの昂まりを見せ、積極性を示した。悦子は男の下半身にあるものをいきなり口に咥え、歯を立て噛んだ。上からかぶさった女体はシックスナインの体位をとっていた。
それで、桑野は快い痛さに耐えながら、顔の上に差し出された悦子の女性器に、痛さのおかえしをした。
開かれた股間の赤く濡れた口に、指を

突き入れていった。指先を鉤型にし、指を肉道の入口あたりでくねらせた。たっぷり濡れていたので、卑猥なこすれの音が発せられた。粘液が泣く音であった。

生々しい形状を示した女性器だったが、加虐の気持ちが少しばかり兆しただけのことであった。桑野は自分のことを変質者などとは思っていない。

R医科大学を放逐される原因となったあの一件は、自分が死体に対して堂々と立ち向かえるということを同じ解剖グループの仲間たちに示しただけのことだった。みんな解剖実習の時間は小心さを示す。初めての時は、食事がのどをとおらない者もいた。“どうせ最後は死体を切り刻むんだろう”と彼は口にした。

そうやって、意気がって見せた末に、外性器部分を摘出したのだった。

標本壜の中の女性器は、彼流に言えば、美しく、かつ、憧れのものとして一先ず保存されただけのことであった。

その桑野の心情のことは、悦子だけは理解していた。二人が知りあったきっかけは街中のことであった。

このとき悦子は染色された向日葵（ひまわり）の大輪のドライフラワーを手にしていた。その途次、薬局に行き、漂白剤や酢酸など を買い求めた。

ちょうど、薬局でテレピン油を購入したばかりだった桑野が、悦子に興味を持ち、薬局を出たところで声を掛けた。

二人で近くの喫茶店に入り話をした。

テレピン油は、古代エジプトのミイラ造りには欠かせない聖油の一つであることなどを桑野が話をしているうちに、二人はすっかり意気投合した。

子リスを死なせる前のことで、悦子はチャッピイを、小久保から仕入れた剥製の技法と、桑野の医学知識を元にした防腐法の技法をとり入れ、チャッピイが死んだあと、死せるペットにしたのであった。

チャッピイの動脈と静脈の一部を切断し、体内の血液を小さな動力ポンプにつないだ管でとり出し、防腐液を代りに注入した。血管の中に防腐液を入れる方法は、生体保持の状態で土葬、またはアパートメント方式の保管庫墓地（イントブメント）に埋葬される風習のあるアメリカで、よく行な

われている方法である。
桑野は、子リスの死体処理を手伝ったあと、人間の死体にも強い関心を寄せるようになった。二人が抱き合う前に交わした会話はこの桑野の関心事と関係のあることである。
が、いまは、二人は生々しい牲のせめぎ合いの中に身を置いていた。
悦子は桑野の男根が充分の勃起の状態を示したとき、女上位のまま、向かい合うかたちをとり、赤い露頭都を濡れた肉の穴に深くとり込んだ。
「あなたの、当たるときの角度がいいの。わたしの感じるところに当たるのよ。ほら、ここ」
悦子は少し腰を引いてみせた。
肉口の前壁部、ちょうど、尿道孔の裏側、肉道の内部でGスポットと俗に言おれているあたりに、腰を沈めるときに反りかえ.った桑野の男根が当たった。
固い肉の襞が出来ていて、その部分をこすられるとむず痒さが生じ、同時に尿道孔に伝わる圧迫感が、悦子の場合は、強い快感となった。
悦子が、男の体の上にのり、積極さを示

すのはこのうまく当たる角度を、自分で調節出来るからである。

小久保の時は、中年男の愛撫に身を任せ、高須のような童貞男はいたぶり、そして桑野の揚合は髪振り乱して性の悦楽に狂う―悦子はおのれの淫蕩さの限りをひとり追い求めているようなところがあった。

ぎしぎしとベッドが軋むと、死んだ子リスのベッドが、悦子の眼の端で生きているもののように揺れた。

それから、悦子はどこか枯れた色の寝室の飾りつけも、視野の内に入れていた。

漂白された大輪の向日葵の花のまわりには、かすみ草の印象を持つ、ぽぁっとした感じの スモークブッシュや、カンガルーの足先のような形状の花をいくつもつけたカンガルー・ポウや、まだ蕾を開かないまま採取された草 花などが、独特の乾いた色の空間を形造っている。

眼を閉じ、自分の体を悦子の好きなようにさせている桑野はあまり感情を表わさなかった。悦子に弄ばれながら桑野は他のことを考えていた。

蒼い陰火を瞼の裏に描く。

この前、乾燥剤のシリカゲルの白い顆粒（かりゅう）を、悦子といたずらし、火をつけて燃やした。

蒼い炎がちらちらと立ち燃えた。舐めるように火は這った。

医師になる道を桜井名誉教授に断たれた男は、怨念の蒼い火を、自らの心のうちに這わせていた。

これで一つは復讐した。どれだけ見事に、あの少年の死体を古代の法にのっとったミイラに仕立て上げるかだな。後世に遺るような完璧な作品をおれは作り上げ、医師の資質があることを世に示してやる…

そう、桑野鋭一は呟いた。

生身の肉体にかえったとき、体の上で踊るように上体を泳がせ、下半身の肉を波打たせている悦子の媚態が眼に入った。

「行きそうよ。わたし、もう…」

男の肉身の咥え方が貪欲になっていた。深く沈めてから悦子は腰を揺曳（ようえい）させ「もう、だめ！」と短く叫ぶと、腰の上下動を激しくさせた。肉の襞が締まり、桑野のものもそれを知覚し、急速に熱感が訪れた。

「あうんっ！」
悦子は首を後ろに反らせた。鎖骨が張り、長い髪がいやいやをするようにうち震えた。

9

学習塾の帰りに失踪した桜井聖人の場合は、本人にも相手を識別する能力があり、また挙 習塾から自宅までは距離にして七、八百メー トル、時刻も午後八時半頃のことで、成城大 学前の銀杏遊木のある通りには、人の姿もあった。
銀杏並木を途中で外れ、坂を下った場 所が桜井家の邸という位置である。
聖人の場合には目撃者らしき者があった。一人で、銀杏並木の通りを歩いていたとき、白い国産車が近づき、聖人に声を掛けた。
塾生の小学生の証言で、その白い車とその目撃者の少年との距離は七、八十メートルあった。先を歩いている聖人を少年は見ており、白い車が聖人のそばに寄ったのまでは視野の内に入れていた。
特に前方を注視していたわけではないから

、少年の証言はあやふやなところもあった。次に目をやったとき、聖人の姿はなく、白い車も車道から消えていた。

その揚所は、桜井家に通ずる横道の手前の位置だったので、聖人は車には乗らず、横手の坂道を一人で下ったのか、白い車に乗り坂道を下ったのかは判別がついていなかった。それ以後の桜井聖人の失踪である。

須藤刑事は成城暑の担当刑事に会い、これだけのことを情報として得た。

担当刑事は、桜井剛人名誉教授の強い要望で、R医科大学を放校処分になった桑野鋭一の周辺を捜査した。退校になるとき、桑野は友人やまわりの者に、二、三の恨みのことばを洩らしていた。

『他の大学でも医学の道にはつけぬように、あの野郎、根回ししたんだとさ』

『おれはいつか復讐してやるさ。あの、爺いの奴の息の根を止めてやる』

『一流のおれは検査技師になり、あいつを見かえしてやる。もっともおれが一人前になった頃にはあいつは生きちゃいない。何をやるかだな』

いずれも一時的な感情から出たことばだっ

たが、復讐の念を桑野が燃やしていることは老教授の耳にも入っていた。
退学後、父親のすすめもあって桑野は二年間コースの医療技師養成コースの専門学校に通っている。相変らず、自慢のパンサーは乗り回しており、専門学校でもかなり目立った存在だった。
担当刑事は、桜井剛人名誉教授が恨みを買う人柄だったことで、その対象者を一つ一つ洗うことにいまは全力を傾注しているところだった。須藤刑事や調布署の、小久保麻美子捜査班はすでに、小久保家の者からは無能者呼ばわりをされていた。もう失踪後二週間が経過しようとしていたのだ。
須藤刑事は再度、ＣＭディレクターの北山を訪ねた。スタジオで撮影中のことで、彼は北山に大いに迷惑顔された。三時間を借り切っての撮影、高いスタジオ料を払うのだから当り前のことだった。
ＣＭ撮影は秋もので、あるファッションメーカーのモデルが三人、軽快なバックミュージックに合わせて“動くファッションショー”を展開した。
自分では風采の上がらない男と思ってい

る須藤はスタジオの隅で、別の世界に踏み込んだことを知り、小さくなっていた。
背景には七色の色彩が投光器で放たれ、光が点滅した。
華やかな舞台が用意されていた。
こんなときに何を考えるのか、須藤刑事はおよそ似つかわしくないことを頭の中に思い描いていた。犯人側から何の連絡もない場合い、また営利誘拐でない場合、応々にして拉致された者は命を絶たれていることが多い。
五歳の女児と九歳の男児を軟禁するには、それなりの場所と監視要員がいる。長びけば長びくほど、犯人側もボロを出す結果となる。須藤は、小久保麻実子の場合は、すでに殺されていることもあり得ると、半ばは覚悟を決めていた。
結局、北山とは撮影終了後に近くの喫茶店で三十分ほど詰をした。須藤は直接、金窪悦子のことは訊かず、北山目身の女性関係のことなどをあれこれたずねた。
外濠を埋めて行く術に出た。北山は小久保麻実子失捺事件に自分も関与していると思われていると疑ぐり、犯人らしいと思わ

れる者の名を自分のほうから口にした。
須藤那事の作戦が当たった。
北山は、彼がたずねる前に、金窪悦子のその後のことを喋った。
カラスの剥製づくりの語である。
カラスの剥製は北山も名だけは知っている前衛風のビデオ作家が、金窪悦子に注文したことがわかった。
須藤刑事は、その男にも興味を持った。北山と別れたあと、教えられた電諸番号を回したが、留守番電詰の声だけが帰って来た。
「ただいまわたくしは海外ロケのため七月十日より約一ヵ月間、日本にはいません」
このメッセージを聞いただけで須藤刑事は受話器を置いた。金窪悦子という女性に、彼は強い関心を抱いた。
古い屋敷に一人暮らしをしている二十三歳の女性なら、拉致した少女を、広い敷地内に止めておくことも可能だと考えた。
もちろん、担当刑事として彼は前にもこのことは考えた。
が、金窪悦子の家に不法に立ち入ることは出来なかった。何の容疑事実も浮かんで

いるわけではない。
いまは勝手に、彼が、容疑者の一人として金窪悦子の周辺を嗅ぎ回っているだけのことであった。
もう一つ、考えを飛躍させた。金窪悦子と 桑野鋭一 の二人の接点である。
須藤刑事は世 田谷・赤堤の地を訪れ、聞き込み捜査を続け た。
あの、桑野鋭一が乗り回している派手な二人乗りのパンサーについての情報を探った。沿線のガソリンスタンドで、多摩ナンバーのパンサーが時折り給油に立ち寄ることを彼は突き止めた。
あとは同じ型の車の写頁を手にし、金窪悦子の家の近所に住む者に、同種の車を目撃したことがあるかどうかを、たずねて歩いた。目撃者が何人かいた。
金窪悦予の屋敷内に車が入るのを見た者の証言もあった。須藤刑事は、桑野鋭一と、金窪悦子の二人の接点を見出した。カラスの剥製づくりを請け負う一風、変った女―金窪況子に須藤刑事は事件関係者の強い匂いを嗅いだ。桜井聖人を連れ去ったのは金窪悦子?と 彼は考えていた

。が、現時点でその日時のアリバイを操るのは止めた。
疑われていると知ったら？
生存の可能性の望みもある少女は殺されるかもしれないと、須藤刑事は思慮を働かせたのだった。

10

小久保怜は苦しい立場に追い込まれていた。妻の日佐子は、一人娘の失踪事件のあと、先夫の伯父に当たる人物を介して、怜に会杜経営から手を引くよう求めていた。また、怜の女性関係をさらに詳細に調べ上げ、不貞の事実をたしかめ得たことから、離婚条件も整っている旨、怜は伯父からそのことも告げられた。
日佐手自身は麻実子の失踪事件後、精神状態が不安定になり、いまは一時的措置として入院させられていた。日佐子は強い妄想を持つようになり、麻実子の失踪には怜自身が絡んでいると、まわりの者には声高に話すことがあった。

小久保怜と須藤刑事は何度目かの話し合いの機会を持った。

これまでは事実関係の聴取が主だったが、この日は、金窪悦子についての質問が多くなった。二人は青山の表参道を出外れた喫茶店の二階で顔を合わせた。

事件発生以後、二人は連絡をとったこともないと小久保は、須藤刑事が金窪悦子のことに触れたとき迷惑顔に言った。

「たとえばですよ。金窪悦子が、娘さんを誰かを使って拉致した。まるで四次元発想ですがね。Ａの場所にある物をＢの場所に移す、それを移した者が、奇想天外の人物なら警察はお手上げなんです。金窪悦子は一度、ドライフラワー造りの個人レッスンをするためにお宅を訪ねている。そのとき、娘さんには赤い薔薇のドライフラワーを送った。品種は『レッド・デビル』だと告げた。黒紅系の薔薇の花、あとから気付いたことですがレッド・デビルとは赤い悪魔という意味でしょう。天から降って湧いたような人物という考えを持てば、金窪悦子、動機はまるで皆無ですが、天下れる条件はあるわけですよ」

「それで、前にも追及されたとおり、わたしが彼女に手を貸したというわけですか？」
「いえ、お二人ともアリバイはあるのですからその件は不問です。金窪悦子に誘拐の動機はありません、が、古臭い言い方なんですがね、魔女めいたところがあるというか。赤い悪魔なんて考えすぎかもしれませんが、犯罪者には得てして自己顕示欲というものがあって、計画犯罪だとしたら、どこかで予告をしておきたいものなのですよ」
「金窪悦子には誰か、協力者がいるのですか？」
小久保の端正な顔立ちの眉根に縦しわが寄った。
「いると考えた上での推理です。どうしても金窪悦子を犯人に仕立て上げたいというこれは強引な発想にしかすぎませんが」
「何か、新しい事実を掴んだというのではないんですか」
いら立ちを小久保は顔に表わした。
「実は、正直な気持ちを言いますと、わたしとしては、金窪悦子が住むという祖父の代からの古い屋敷とやらを、隅々までも家宅捜索してみたいという心境なんです。しかし、

捜査令状はなし、立場上、わたしとしては不法侵入するわけにはいかないんですよ」
「協力するとしたら、わたしに何かやれることはあるんですか？」
「とつぜん、今夜にでも、金窪悦子の家を訪れるというのはどうですか？彼女は剥製の造り方にも興味を持ったのでしょう。その後〝子リスを剥製にし、カラスを三羽、剥製にしたそうでな。彼女の仕事部屋の様子など、あなたに探って欲しいんですよ」
須藤刑事の眼は真っ直ぐ、小久保に向けられた。決意を相手に強いていた。
「わかりました。わたしに出来ることなら何でも協力させてもらいます」
と小久保は同意し、二人は話の段取りを決めた。
夜道を高須慎司はバイクを走らせた。
家を出るまでは夕立ちがあり、風もあったが、いまは雨上がりのあとの涼しさで、風に吹かれている高須は夏の暑さを感じなかった。雨に濡れた緑が眼に染みた。
やがて夕闇は、あたりの風景を闇の中に溶け込ませて行った。その時刻頃には、高須は都内に入り、世田谷・赤堤の住宅街の小路

にバイクを乗り入れていた。
金窪悦子の家の高塀をめぐり、小さな空地の場所に高須はバイクを隠した。夏草が猛っていた。今夜の高須は忍び足だった。
勝手知ったように、表門脇の木戸口を押した。鍵は掛かっていなく、高須は容易に邸内に入った。
それらの様子を離れた闇から眺めている男がいた。高須がバイクを隠した草地の、もう少し奥の樹陰に潜んでいたのは須藤刑事だった。午後九時半に小久保には来るよう伝えておいた。小久保は車で来る予定だった。時計を見たらまだ九時半に七、八分前、のんびり草むらに坐り、待ち構えていたら一人の若者がやって来た。
にわかに須藤刑事は緊張した。若者の一部始終を見取ってから、バイクのナンバーを手帳にメモした。もちろん、いわくありげな身のこなしで邸内に消えた若者の姿は目に止めていた。
（金窪悦子と通じている第三者？）
須藤刑事は自分の頭の中にある四次元発想の非現実図に、現実的な犯行の役割を演じる男を一人、加えた気になった。

少しばかり、胸もときめいた。
眼の前で思わぬハプニングが起きたので、須藤刑事は、定刻頃に現われた小久保の車を制止し、一時、計画を中断させた。
邸内の部屋の明りは灯っており、金窪悦子は在宅と思われた。
小久保は電話などでの事前連絡は当人にはしていない。
蚊に喰われるのを覚悟でやって来た須藤刑事だったが、お陰で小久保の車の助手席という快適な揚所を得た。
須藤刑事は、R医科大学を放逐されたという桑野鋭一の顔写真はすでに所轄署から入手していた。医学生だった頃の、大学に提出された顔写真である。
それで、バイクの若者が、桑野鋭一ではないことはわかっていた。
何か語り掛けようとする小久保を、須藤刑事は制した。
これからどうすべきかについて頭をめぐらせ始めていた。まるで不法侵入者のように、あたりを見回しながら邸内に入った若者からどんな情報が得られるか、また、犯人グループの中の一人なのかと考えた。

もちろん、若い男がただの金窪悦子のボーイフレンドで、金窪悦子自身も、今度の事件とは一切関係ないことも考えられる。
むしろそちらのほうの可能性のほうが大きく、彼はもしかしたら自分だけがこのドラマでは三枚目の役を演じているのかもしれないと、ことを悪いように考え始めてもいた。

11

外灯の明りは高い塀と伸び放題の庭樹の枝主に遮られて、月明りにも似た余映を邸の敷地内にとどけているだけだった。
高須慎司は、庭の隅のコンクリートボックスに近付いた。
今夜は工具箱を用意した。鉄扉を開けるための小道具の持参だった。
カーポートには、桑野の所在を示す車の姿はなかった。高須は小さなポケットランプで錠前の金具のある位置をたしかめてから、金具のねじを外しに掛かった。錆びついていたが、外すのに時間は要さず、高須は鉄扉の軌りの音に注意を払いながらコンクリート部屋の内部に足を踏み入れた。
そおっと、内側から扉を閉めた。

あとは大胆になった。

角型の懐中電灯を手に、室内を検分した。ガラスの大型水槽の中にはまだ彼の捕獲した三羽のカラスの死体がナトロン液に浸されていた。高須の興味は地下室にある。

悦子の話では戦争中に作られた地下壕があるということになる。

床上の鉄蓋を開け、高須は下に通じるくの字型の石段に足を掛けた。

恐る恐る、足下を明りで照らす。四メートルほども下ると平らなコンクリート床に足が着いた。

背をかがめなければ通れない石壁の地下壕を目にする。天井は低かったが、通路の横幅は二メートル近くはあった。ここまでは冒険者のつもりで、高須は歩をすすめて来たが、一歩すすむごとに胸が高鳴り始めるのを感じた。高須が嗅いでいる秘密の匂いには死の匂いのようなものがあった。

もちろん、高須は警察関係者からは、マーク外の人物だったから、少年と少女が同時期に失踪しているという事件のことは知らない。

いまは金窪悦子の変った性格のことよりも、医師になる資格を剥奪された桑野鋭一の役割のほうに高須は関心を持っていた。

地下室には、様々な小動物や、枯れた草花などがおかれているに違いない—高須は怪奇映画の一コマでも見る思いになり、一人、潜入を試みたのであった。

地下道は十メートルもすすむと行き止まりになり、五メートル四方ほどの四角い部屋が奥にはあった。

地下倉庫といった趣きで古い家具類や雑多な品が一隅のコンクリート壁に乱雑に積み重ねてあった。

が、一方の壁際だけは、整然と片付いていた。祭りごとの仕掛けがあった。

小さな祭壇のようなものがあり、その前に二つの箱型の棺が二つ並べられている。

それからステンレス製の手術台が一方の壁に沿ってあるのが高須の視野の内に入った。

壁に懸架された飾り棚がしつらえられていた。一見、手術室の様相も見て取れる。

メスやピンセット、鋏（スライザー）、鉗子（かんし）などの手用の金属器具、それか

ら二、三十本分はある薬品類が並べられているのが目についた。
これらの光景はコンクリート都屋に似合う寒々とした印象を高須に与えた。
が、ここはまた死の花園でもあった。
祭壇や二つの人型棺のまわり、そして祭壇に向かった左右の両面の壁には、枯れた花や、草木が妖しげに飾り立てられていた。
ちゃんと、それらしく、レイアウトされてもいる。丈の高い草類（グラス）は床の上にあり、風が吹けばいまにもそよぎ立つようであった。そして色合いを添える花たちは、二つの人型 棺をとり巻くように、赤や黄、紫、そして茶褐色の花々を、この場に隠微に咲かせていた。
懐中電灯の明りがすべての色を映し出していたのではない。高須は枯れた野に一人立っている気がしていた。色を表わした花も、燻んだ色合いの中に沈んでいるかに見えた。冷んやりとした空気の冷たさも、高須は忘れた。憑かれた者のように、正面の祭壇のある場所にと、高須は歩をすすめていた。
コンクリートの床上に直接、二つの木の棺

が置かれていた。
高須はその中にあるものが何なのかも、もう、大方は見当がついていた。
それでもまだ小さ目の棺なので人間用のものではないなどと考えようとしているーそれが何かを詮索するのが怖かったのだ。
が、棺の前に立ったとき、高須は背筋に寒気を覚え、自分が明りを投げた対象物から眼を逸らせようとした。
左側の棺にはウエディングドレスの白い衣裳に包まれた少女の死体が眠っていた。
レース地は透けており、少女は裸身に花嫁衣裳をまとっていたのであった。
唇には赤い紅がさされていた。
悦子の手造りの作品なのか、小さな白い花の冠が少女の黒髪を飾り、そして手には白いフリージャの花をあしらったブーケが握られている。
棺の中には深紅の薔薇の花蕾（からい）が、ぎっしと、敷き詰められていた。
赤い悪魔（レッド・デビル）という黒紅系の薔薇の花だった。
彼が見ているのは少女の死顔だったが、その気高い美しさに高須は息をのんだ。

飾られた人形のような印象さえある。
が、もう一つの人型棺に明りを転じたとき、高須は危うく懐中電灯をとり落しそうになった。
一人の少年の死顔を眼に止めた。
が、その面相は醜悪な表情に変えられていた。眼玉は刳（く）り抜かれ、頬には何条ものメスの跡があった。
それも左右対称の形の深い傷で、明らかに傷つけられたものだった。
口の端もメスで裂かれていた。
解剖でもしたのか、裸の体は体の中央から裂かれ、また開腹されたらしく、手術用の糸で縫合されていた。
それでも高須は勇気をふるって、明りを死体の足元のほうにと向けた。
「あ…」
と高須は声をのんだ。
少年の股間にあるべきものは切断されていた。薬品棚の上にある標本壜の中にフォルマリン漬けにされたその一部はあったのだが、このとき、高須はそのことには気付かなかった。
正面の祭壇にやっと高須は顔を向けた。小

さ目の木椅子が背を壁際にし置かれていた。台座の上に緑色の広口壜が置かれている。やはり、枯れた草花がその場所には飾リ立てられていた。

壁に詩文を書き列ねた一枚の雁皮紙（がんぴし）が貼ってあった。

その文宇は悦子の筆跡だった。

口をききたまえ
おしのまねはもうたくさんだ
来給え　そして汝の舌により
その調べを聞かせてくれ
ミイラよ　地上に脚で立ち
ふたたび月光に照らされて
やせた幽霊のようにも見えず
魂のない生物の　ようにも
しかして汝には骨が　肉が　手足が
そう　顔がある

高須は“『ミイラへ、キャンベラの長編の一節をここに記す』”と添え書きされた悦子の筆跡文宇を最後まで読み了えた。

と、急に高須の体にがたがたとふるえが来た。明りを消したくなった。

が、真暗闇になると、闇の底に自分が落ちて行くような気になり、高須は明りをつけた懐中電灯をしっかりと握り締めたまま、地下道から逃げ出した。

背後の闇から死者たちの呼ぶ声が聞えた。その声は木霊（こだま）し、彼を追いかけるように地底から湧き起こって来た。男が慌てたふうに金窪悦子の木戸口から出て来たとき、須藤刑事は小久保の車の助手席からそっと外の闇に出た。

小さな草地の近くだったので、バイクの置いてある場所に先回りした。

高須は息せき切って草地にやって来たとき、須藤刑事が呼び止めた。

闇から急に声を掛けられ、高須はその場にへなへなと腰をつけ、へたり込んだ。驚いた顔を向けた。

須藤刑事は、金窪家の邸内に入り込む前に、高須から地下室が、死の祭宴 の場になっていることを知ることになった。

地下室に通じるコンクリートボックスの建屋の錠前の金具は壊されたままの状態にあった。何者かが潜入した形跡を悦子らが見つければ、少年と少女の死体はどこ

かに持ち去られる可能性があった。
須藤刑事は本署に応援の刑事の派遣を要請し、三人の警官が到着するのを持ってから、単身、名を名乗り捜査に協力してもらいたい旨を告げて、邸内に入り、悦子に会った。
夜分に乗り込まれたことで悦子は迷惑顔をしてみせたが、一応は機嫌よく応じた。
麻実子失失踪事件のことに触れながら、須藤刑事は自信たっぷりの会話を楽しんだ。
「ご近所の老人に聞いたのですがね。お宅の敷地の下には地下壕があるそうですね。あなたは一度、麻実子ちゃんの顔を見ているし、もしかしたら誰かに頼まれて、その地下壕に麻実子ちゃんを囲っているのではないかと考えたのですよ。まるでこれは有り得ない話ですが」
須藤用事の話の序章はここから始まった。
それから高須慎司が侵入し、地下の様子を探り、邸外に出て来たところを事情聴取した旨、彼は悦子に告げた。
悦子はもう観念したようだった。
塀の外で待機していたパトカーに携帯無

線電話で指示を出し、二人の警官と高須を邸内に入れた。

悦子に道案内してもらう必要はなかった。高須が先頭に立ち、須藤刑事を、地下壕の死の部屋に案内した。

須藤刑事は、寝棺の中の少女が、小久保麻実子であることを確認したが、顔を傷つけられている少年の遺体のほうは、この時点では桜井聖人とは断定することが出来なかった。

同じ時刻、成城署の刑事が、桑野鋭一の自宅を訪れ、署への任意同行を求めた。

少年と少女の、二つの失踪事件は、急転直下、解決を迎えたが、結果は幼い命が奪われるということで後味の悪い結末となった。

取調べで明るみに出たのは、小久保麻実子を拉致したのは、桑野鋭一で、また、桜井聖人を熟帰りに誘い車に乗せたのは、金窪悦子だと判明した。

聖人は祖父と父親の名を言われ、女が同じ病院の看護婦だと告げ、桜井家に向かう途中だと告げたので同乗したのだった。

二人とも、桑野鋭一が、父親の経営する病院から持ち出したクロロフォルムを嗅がされ、何の抵抗もすることなく、金窪悦子の家に運ばれた。

初めに、桜井家に復讐するためにその方法として、聖人を勾引（かどわか）すのを提案したのは桑野鋭一のほうだった。

秘密の証しを求められた悦子はその証しとして、先に麻実子を殺し、ミイラ体にすることに同意した。美しい花のように死化粧を施し、悦子は少女の裸身を花嫁衣裳で包んだ。それは少年への捧げ物でもある。

花の野に永遠に横たわる美少女―悦子は花を殺すような想いで、生きた人間を死に導いたのであった。

医学を学んだ桑野は、二つの死体にほぼ完全な防腐処置をほどこしていた。血は抜かれ、防腐液（ホルムアデヒト）と交換され、そして摘出された内臓は二人がカノボスの壷と呼んだ磁器製の壷に、松脂でコーティングされて保存されていた。

聖人が、無惨な死体で発見された知らせを受けたとき、桜井剛人名誉教授は、急性の心筋梗塞を起こし、そのまま死んだ。

桑野鋭一は罪を負う代りに、その怨念の思いだけは晴らしていたことになる――。

（了）